

かんざしとお天道さま

安平 冬美江

大きな白い玉がひとつ、きやしやな金色の軸じくの先をかざるかんざしだった。あっさりとしたつくりだが、その玉が、とろりとあたたかみのある光をはなっていて、なんとも愛らしい。せつは、ぽうつと見とれてしまった。

「どうぞ、つけてごらんなさいまし」

店のおかみが、せつに笑いかけてくる。

「あ、いえ……」

せつは目をふせ、顔を赤らめた。町へ下働きに出てきたばかりの娘に買えるものではない。この表通りの小間物屋こまものやには、そんな用で来たのではない。家の奥方おくがたにたのまれて、歯みがき粉を買いにきたのだ。

「そんなことおっしやらずに、さ」

おかみは鏡をむけてくる。せつは、かんざしに目を落とした。やわらかい光をまとう玉は、ころんとして、かわいらしい。おずおず

と手をのばした。おかみの笑みが広がった。せつは、かんざしを髪にさし、そおつと鏡をのぞいた。

そこには、つぶらな瞳ひとみの十二の娘がうつつていた。白い玉は、日だまりのようにほわりと光って、娘の心をあたためた。

村にいたときも、一度だけ、こんなふうには髪かざりをつけてみたことがあった。

あれは、せつが働いていた庄屋しょうやに、商人が櫛くしやかんざしを売りにきたときだった。庄屋とは、村をまとめる家のことだ。もめごとをおさめたり、こまった人の相談にのったりする。村一番の金持ちでもある。

庄屋では、せつのほかにも、何人もの娘が働いていた。その娘たちの前に、商人は背中の大きな荷にから、つぎつぎに髪かざりを取りだしてならべた。娘たちは目をかがやかせて熱心に見入った。給金きゅうきんからためたお金をにぎりしめて、髪かざりをためす者もいた。

その輪の中に、せつもいた。見てみたい気

持ちをおさえきれなかったのだ。

秋祭りが近いころだった。南天なんてんの赤い実をえがいた櫛が目にとまった。

（かわいい……）

そろそろ手をのばすと、べつの手とぶつかった。庄屋の娘の千恵ちえだった。ふつくりと丸顔の、せつと同じ年ごろの娘だ。祭りで身につけるものを見にきたのかもしれない。千恵は、せつを見て肩をすくめると、「どうぞお先に」と鏡を指さした。

せつはためらった。家は貧しかった。お父とうもお母かあも病やまいでなくし、ばあちゃんとふたりの暮らしは、せつがささえていた。手をのばしたのを後悔した。しかし、商人はにやにや笑って「ささ、どうぞ」とすすめてくる。一度だけ、と思った。ちよつとだけ、櫛をさした自分を見てみたかった。

せつは美人ではない。黒々とした瞳はしずかな光をたたえていたが、まゆのうすい顔立ちには、むしろさびしげだった。が、櫛をさす

と、南天の赤に、ぱつと顔がはなやいだ。せつは思わず口もとをほころばせた。

商人がほめた。娘たちも「よおにおお似合 うとる」と口々にいった。うれしかった。

「こんどは、わたし」

千恵が手をのばしてきた。せつは、夢からさめたような思いで櫛をはずし、手わたした。櫛は千恵にも似合った。

「これ欲しい。ね、いい？」

千恵に上目うわめづかいでそういわれれば、うなずくしかなかった。千恵なら父親にねだるところができる。娘たちは「いいなあ、千恵さんは」と、にぎやかにうらやんだ。せつはその輪を、そつとぬけだした。

家に帰ると、せつは体をまるめて泣いた。せつが泣くと、ばあちゃんはそのたびに、せつをだきしめて、こういった。

「せつ。正直にけんめいにやっておれば、きつとお天道てんとさまは見えてくれておる」

せつは、こくりとうなずいた。空のお天道

さまは、せつとばあちゃんを見捨てはしない。それに、お天道さまのそばでは、お父とお母も、せつたちを見てくれているはずだ。

やがて、そのばあちゃんも死んだ。庄屋は、町の住みこみの働き口を、せつにすすめた。せつは、家にひとりきりでいるのにたえかねていたから、その話にすがるように町へ出てきた。春のはじめの日ざしに、人々の顔がほつとゆるみはじめたころだった。

新しいつとめ先は、お侍ごひむぎの家だった。ご家族は、旦那だんなさまと、奥方と坊ちゃん、それから、旦那さまの母君ははぎみであるご隠居いんきよさまの四人だ。お侍といっても、貧乏なお家のようだと、せつは思った。生活はつましく、庭には旦那さまが儉約けんやくのために耕たがやした畑があったし、ご隠居さまも奥方も身なりは質素しっそだ。下働きは、旦那さまの付き人のじいさんがひとり、家から通ってくるだけで、住みこみは、せつひとりだった。

ご隠居さまは、いかめしい顔つきをした、

とつつきにくい人だった。せつがへどもどと頭をさげても、じろりとせつを見て、うなずいただけだ。あとでおとなりからきいた話では、ご隠居さまが、うわついた娘をきらうせいで、下働きはすぐにやめてしまおうという。せつは泣きそうになった。

ところが、このご隠居さまが、せつのはいくらか気に入ったらしいのである。

「あんたが漬ける香こうの物つけもの（漬物）はうまいね」

それが、はじめてご隠居さまにかけられた言葉だった。つとめはじめて五日目の朝のこどだ。せつはぽかんとして、それから「ど、どうも」と頭をさげた。村を出るとき、ばあちゃんのぬか床ぬかどをどうしても捨てられなかったものだから、町までかかえてきて、台所のすみに置かせてもらっていたのだ。

「まめにぬか床の面倒めんどうを見られる、ちやんとした娘のようだね、あんたは」

胸の中に、ぽつりと灯ひがともったようだった

た。ばあちゃんが守ってくれているのだと思  
った。

「よくお似合にあいですよ」

せつは、どきりとして、顔をあげた。小間  
物屋のおかみがつこりと、ふくよかな桃色  
の頬ほおにえくぼをうかべた。

せつは鏡を見つめた。さびしい不安げな瞳  
が、せつを見かえした。

（…：あたしにも、似合うのに）

南天の赤い実の櫛は、千恵にも、せつにも、  
似合ったのだ。なのに、どうして千恵とせつ  
は、こんなにならうのか。

（…：あたしにだって、似合うのに）

千恵のように、これが欲しいといたかつ  
た。でも、そんなことはできないのだ。これ  
からも、ずっと。

ため息をついて、かんざしをはずそうとし  
たとき、若い娘が、すいと店先に来た。

「こんにちは、おかみさん！」

「あら、みっちゃん」

おかみの気が、せつからそれた。それを見  
たせつの中で、ごとりと、なにかが動いた。  
かんざしをもどそうとしていた手が、とまっ  
て、それをにぎりしめた。とくとくと胸が鳴  
った。ひくつと喉のどがしまった。にぎった手は、  
とまったままだ：：かと思うと、たもとの中  
にするりと、かんざしをうつしてしまった。  
あつというまのことだった。

じんと頭がしびれた。店のざわめきが、す  
うつと遠のいた。どくんどくと波うつ心臓しんぞう  
の音ばかりが耳の奥でひびいた。

目だけで周囲を見まわした。だれも見えてい  
ない。おかみは「みっちゃん」と親しげに話  
しつづけている。せつは、ゆつくりと腰こしをあ  
げ、あえぎながら立ちあがった。そして、じ  
りじりとしりぞいた。それから、息をすいこ  
むと、いっさいのものをふりきるように通り  
へとびだし、一目散いちめくせんにかけだした。

後ろをふりかえったりはしなかった。そん



なことはおそろしくてできなかつた。ひたすら走った。自分の下駄げたの音ばかりが、からからとひびきわたっているような気がした。通りを歩く人が、みんな自分を指さしているように見えた。苦しくて心臓がやぶれそうだった。それでも走りつづけた。

店がとだえ、人がまばらになつたあたりで、せつはようやく足をとめて、はあはあと息をついた。

全身の血がわきたつていた。なんと大それたことをしてしまったのかと、自分が信じられなかつた。悪い夢だと思いたかつた。だが、たもとをさぐれば、かんざしの玉が指にふれた。

（あたし、なんてことを……）

今からでも返しに行こうか。だが、店のおかみはもう、町役人を呼んでいるかもしれない。かかった。そこへ出ていけば、つかまってしまふ。つい手が動いてしまいました、もうしわけありませんでしたと、あやまつたところで、

ゆるしてもらえらるゝとは思へない。盗みを働いたことがわかれば、つとめ先から追ひ出される。庄屋に知られば、村にも帰れない。せつは、ぞつとした。

（ああ、ほんとに、なんてことを……）

日が暮れかかった道を、足を引きずりながら帰っていった。家に着き、奥方の顔を見てようやく、たのまれた歯みがき粉を買ってこなかったことに気がついた。

「あの、あの……」

ぶるぶるとふるえるばかりで、なにもいへなかつた。奥方は、道に迷つたのかと、せつの顔をのぞきこんでたずねた。せつは両手にぎりしめ、うつむいた。

奥方はやさしい人だった。声をあらげるところなど見たことがない。このときも、奥方は夕顔の花のようにふわりとほほえみ、「そう。なれない道を行かせて、すまなかつたね」と、せつをねぎらつてくれた。

かんざしは、なやんだあげく、古い手ぬぐ

いにくるんで、わずかな持ちものが入った  
行李こうりの底にかくした。せつには、台所のわきの北側の小部屋があてがわれていた。小さな窓がひとつあるだけで、昼でも、ひんやりとうす暗い。その部屋の、けっして日の光がとどかない行李の奥底に、かんざしはひっそり  
としまいこまれたのである。

それからというもの、せつはもう、おきて  
いるあいだじゆう、かたときも休まず働いた。  
さいわい仕事は山ほどあった。奥方は、よち  
よち歩きをはじめたばかりの坊ちゃん  
の世話で手いっぱいだったからだ。

朝おきると火をおこし、飯めしを炊たき、野菜を  
ぬかに漬け、掃除をし、坊ちゃんのお守もりに  
ご隠居さまのお世話と、朝から晩までくるく  
ると働いた。疲れはてるまで働けば、夜は、  
かんざしのことを思いだすまもなく、すとな  
と寝入ることができた。

盗みのことをわすれようとした。頭を空つ

ぽにしたくて、とにかく体を動かした。なにも考えたくなかった。考えそうになると、ぶんぶん頭をふった。もとから口数が多いほうではなかったのが、いつそうだまりこみがちになった。日はのろのろと過ぎていった。そんなある日、ご隠居さまが、せつにじろりと目をむけた。

「おまえ、やせたんじゃないかい」

あさめし

朝飯 ときだった。せつは給仕きゅうじをしていた。

下働きだから、ご家族が食べおえてから、台所でひとりそそくさとかきこむ。いつもそうだ。だが、実のところ、近ごろはほとんど食べていない。食欲がわからないのだ。

「病に取りつかれたんじゃないだろうね。具合でも悪いのかい」

せつはふるふると首をふった。だが、ご隠居さまは、うたがわしそうに、せつから目をはなさない。

「……ちゃんと食べてるんだらうね？」

せつは、ぎくりとして、それから、小さく

うなずいた。ご隠居さまは顔をしかめると、だまりこくって、なにやらじっと考えこんだ。せつは身をちぢめた。

どのくらいそうしていただろう。うんと長いときがすぎたような気がした。やっこのことで、ご隠居さまは口をひらいた。

「せつ。おまえ、きょうからここでいっしょに食べなさい、いいね」

せつは、目をまるくした。主人のご家族と下働きがいっしょに食事をするなど、きいたこともない話だった。だが、ご隠居さまは、すずしい顔だ。

旦那さまも、母上がそうおっしゃるならと、おっとりうなずいただけだった。孝行こうこう息子の旦那さまは、いたって素直な方で、どんなことであれ、ご隠居さまに反対をとなえたりはなさらない。奥方も、せつにあたたかい笑みをむけた。

こうなれば食べないわけにいかなかった。

せつは遠慮えんりよしいしい、ご家族とともにすわり、

ごはんを無理やり喉におしこんだ。

（気むずかしい方だと、思ってたけど……）

ご隠居さまなりの心くばりだと、せつにはわかった。せつが食べていないことを見ぬき、食べるようにしむけたのだ。

そつと横目でうかがうと、ご隠居さまは、タケノコをぽりぽりとかんでいる。おととい、おとなりからいただいたものを、あくぬきして、ばあちゃんのぬか床に漬けておいたものだ。ご隠居さまが満足そうにうなずく。気に入っていただけたらしい。

「ほうら、おまんまですよ」

奥方は坊ちゃんの口もとに、おかゆの匙さじを運んでいる。旦那さまは庭を見ながら、ゆつたりと、みそ汁をすすっている。畑の苗の育ちぐあいを気にしているのかもしれない。

「おかわり」

ご隠居さまが、せつに茶わんをつきだす。せつはあわてて、おひつからごはんをよそつて、それをさしだした。そして、ふたたびす

わって飯椀めしわんを手にとり、部屋を見まわした。  
昔は、せつも、お父とお母とばあちゃんと  
そろって食べていた。そこから、お父とお母  
がいなくなり、ばあちゃんもいなくなり、ひ  
とりになった。

(ばあちゃん……)

ひさしぶりにばあちゃんを思った。ばあち  
やんを思うと、胸がぬくもった。今ばあちや  
んがせつを見たら、なんというだろう……そ  
う考えて、はっとした。

(だめだ)

ばあちゃんが、あのかんざしのことを知れ  
ば、どんなにがっかりするか。せつは頭をふ  
った。考えちゃいけない。考えたらだめだ。

「どうしたんだい、せつ」

ご隠居さまが、せつを見て首をひねる。せ  
つは小さく首をふると、ごはんを口に入れて、  
涙がにじむ目をふせた。

それでも、ひと月、ふた月とすぎるにつれ、

盗みのことは頭のすみに遠ざかっていった。

「小間物屋で盗みがおきた」という話も流れてこない。このままなかつたことになればいいと、せつは願った。このまま素知<sup>そし</sup>らぬふりで、やりすごせるかもしれないと、思うことさえあつた。だが、部屋のすみの行李の底には、今もかんざしがねむっている。それを思いだすたびに、暗い穴に引きずりこまれるような気がした。

声を耳にしたのは、そのころだ。

せつは、ふき掃除が好きだった。ぞうきんをよくしぼり、よつんばいになって腕を右に左に規則正しく動かし、力をこめて床をこすっている、頭を空っぽにすることができた。だから、手持ちぶさたになると、床ふきにいそしんだ。ふきおえて、つやつやと光る床を見ると、せいせいとした。

だれともわからない声を、はじめて耳にしたのは、そんなふうに床を見ていた昼さがりだった。こころよい全身の疲労にぼうつとし



ていた、せつのうつろな頭の中を、声は、遠い風のように通りすぎていった。

おそとにでたいよ……

かすかな、すんだ声だった。坊ちゃんだと思つた。坊ちゃんは毎日お昼寝をするのだが、なかなか寝つかずに奥方の手を焼かせることがある。そんなときは、せつが庭へつれだしていた。

「は、はい、ただいま」

たらいとぞうきを台所のすみに置き、急ぎ足で奥方と坊ちゃんの部屋へむかった。しかし、行ってみれば、ふたりともねむっている。坊ちゃんは上がけをけとばして大の字になり、奥方はそのかたわらで腕まくらをして、どちらもすうすうと寝息を立てていた。

足音をしのばせて部屋から遠ざかりながら、せつは首をひねった。

（いったいどこから？）

立ちどまり、両耳に手をかざして、目をとじてみた。なにもきこえない。こずえが風にゆれて、ざわざわと鳴るばかりだった。

だが、しばらくたったころ、また声をきいた。このときは、ほうきで庭をはいていた。

おそとにでたいよ……

なつかしいような、すんだ声だった。せつはあたりを見まわした。坊ちゃんは、畑仕事を  
する旦那さまのそばで、みみずを掘りかえして遊んでいた。

おそとにでたいよ……

空を見あげると、暗い灰色の雲が広がっている。季節は梅雨つゆに入っていた。

おそとにでたいよ……

おてんとさまの おかおをみたいよ……

せつは、手をとめた。声が頭の中をめぐつた。おてんとさまの、おかおをみたいよ……おてんとさまの……。

「うつとおしい空だねえ」

いきなり後ろから、はりのある大きな声がひびいてきて、せつはとびあがりそうになった。ふりかえると、ご隠居さまが、口をむつと「へ」の字にして、空をにらんでいた。

「だがまあ、これも季節の恵みさ。ときがたてば、いつかはすぎさる。どんなにつらいことでも」

そういうと、ご隠居さまは、さぐるような目をぴたりと、せつにすえた。

「ところが、おまえはここへ来て、もう三月みつき、四月よつきがすぎようつてのに、笑ってるのを見たことがない。よほど里が恋しいのかい」

いわれてはじめて気がついた。長いあいだ、笑っていない。

胸のうちに村の景色が、さあつと、とどめようもなく広がった。今ごろは田んぼでも畑でも、春に植えた苗が青々と育っているだろう。みんな毎日草取りに追われながら、恵みの雨をまちかまえているだろう。

あのころはよく笑った。田んぼでかえるを追いかけて、ころんで泥だらけになっては笑った。ばあちゃんが漬けた、たくあんの切れはしをかじっては、「おいしいね」と笑った。どうして、あんなに笑っていられたんだろう。

お金持ちの親がいる千恵が、うらやましかった。貧しいことがつらくて泣きもした。けれど、せつは、毎日胸をはって働いていた。暮らしをささえていることが誇ほこらしかった。朝おきるたびに、きょうもがんばらなくちゃと思えた。

（かんざしを盗んでからだ。ちっとも笑えなくなつたのは）

そう思ったとき、あの声がまた、頭の中を

流れた。

おてんとさまの　　おかおをみたいよ……

膝ひざがこまかくふるえはじめた。せつが泣いたとき、ばあちゃんはいつも、せつをだきしめてくれた。そして、こういって、せつをなぐさめてくれた。

「せつ、正直にけんめいにやっておれば、きつとお天道さまが見てくれておる」

盗みのことをわすれたくて、なにも考えないようにした。頭の中を空っぽにしようとした。そして、ずっとせつを大切にしてくれた、ばあちゃんの言葉まで、頭から追いだしてしまっていた。

なんてひどいことをしたんだろうと、自分が腹立たしかった。ばかだったと思った。なさけなかった。

（ごめん、ばあちゃん。ごめん……）

目から涙が、ほろほろとこぼれはじめた。

ばあちゃんに会いたかった。だきしめてもら  
いたかった。しかし、もう、ばあちゃんはい  
ない。

（ばあちゃん……ばあちゃん……）

ものもいわずに泣きだしたせつを、ご隠居  
さまは、じつと見ていた。ばあちゃんのように  
に、だきしめてくれたりはしなかった。だが、  
ひとりぼっちの娘を置いていたりもしなか  
った。しばらく見まもってから、ご隠居さま  
は、せつの肩をぽんとたたいて、こういった。

「おまえはよくやってくれている。おまえが  
来てから、わたしの足袋たびは、めっきり汚れな  
くなっただからね」

せつがしじゅう床みがきをしていることに、  
ご隠居さまは、ちゃんと気づいていた。

「つらくても、しんぼうだ。うちとしちや、  
かげひなたなく真っ正直に働いてくれる、お  
まえのような娘には、長くいてほしいと思っ  
てるんだからね」

せつの胸にちくりと、針で刺されたような

痛みが走った。自分が真つ正直な娘でないことは、だれよりも自分がよく知っていた。

ご隠居さまは、すたすたと歩みさつていく。

その後ろ姿に、せつはそつと手を合わせた。

（もうしわけありません……もうしわけありません……）

かんざしを返そうと思った。もうどうしても、返さないわけにはいかなかった。返せば、せつの盗みは知れわたる。この家にも、いられないだろう。ご隠居さまはどんな顔をなさるか。考えただけで、つらかった。

それでも、返そうと思った。

（ばあちゃん、助けて）

空は雲が重くたれこめて、今にも泣きだしそうだ。きつとばあちゃんも、こんな顔をしていると、せつは思った。

夕方からふりはじめた雨は、夜がふけてもいっこうにやむ<sup>けはい</sup>心配がなかった。ねむろうと目をとじても、せつはちつとも寝つけなかつ

た。かんざしのことが頭をはなれなかった。  
何度目の寝がえりをうったときだった。だろ  
う。雨音をぬって、なにかきこえたような気  
がして、せつは目をひらいた。

おそとにでたいよ……

こんな雨の夜にどうして、と思った。声が  
まだ耳に残っているだけだ、とも思った。だ  
が、じっとしていると、またきこえてきた。

おてんとさまの　おかおをみたいよ……

せつは、ぎくしゃくと起きあがった。

「……だれ？」

空気がじつとりと肌にまとわりついた。雨  
音はいよいよ高い。それでも声はとどいてく  
る。おそとにでたいよ……おてんとさまの、  
おかおがみたいよ……。

ふっと、行李を置いてある部屋のすみに目



が吸いよせられた。せつは寝床ねどこを出ると、暗がりの中、目をこらし、床に膝をすべらせ、そこへ近づいていった。声が外からきこえてくるのか、耳の奥からひびいてくるのか、せつにはもう、わからなかった。

手さぐりで行李の底から、手ぬぐいのつつまを取りだした。そして、注意深く布をひらいた。すんだ声は、うたっているようでもあった。

おそとにでたいよ……

おてんとさまの　おかおをみたいよ……

「……お外に出ようね」

せつは、手のひらのかんざしにささやきかけた。

「ごめんね。ずっとこんなところに、とじこめて」

このかんざしにも、かわいそうなことをしたのだと思った。ずっと日のあたらないうとこ

ろにとじこめられて、うれしいはずがない。  
だれかの髪の上で、美しくかがやくために生  
まれてきたのだから。

雨音のせいで、そっと近づいてくる足音に  
は気づかなかった。足音は部屋の外でとまり、  
しばらくしてから、ふすまがするりとひらい  
た。せつは顔をあげ、息をのんだ。

「ご隠居さま……？」

声はいつしかやんでいった。雨の音だけがひ  
びいていた。暗がりのなかで、ご隠居さまが  
小声でいった。

「ちやんと寝ているかと思って来てみれば、  
やっぱりおきてたね……：：：いったい、なにをや  
っているんだい。」

明け方には雨はあがり、青空が広がった。  
せつは、表通りの小間物屋へむかっていた。  
ご隠居さまもいっしょだった。せつの話をき  
いて、ご隠居さまは、自分も行くといっただ  
った。

ふたりとも、だまりこくっていた。ご隠居さまは、一歩一歩、地面をふみしめながら歩いていった。せつは、その背中を見ながら、とぼとぼと歩いた。

いかめしい顔つきの老人に、話したいことがあるといわれて、店のおかみも、ただごとではないと感じたのだらう。ていねいに奥の

座敷<sup>ざしき</sup>へ通してくれた。

そこで、せつはおどろかされることになった。ご隠居さまは、とちゅうで買いもとめた、まんじゅうのつつみをさしだすと、両手をついて、おかみに深々と頭をさげたのだ。

「うちの者が、こちらの大切な商品を盗んでしまいました。ここにお返ししますので、どうかお受けとりください」

たたみにひたいをすりつけた老人に、あわてたのは、店のおかみだった。

「ま、どうぞ頭をおあげになって、どうぞ」「いや、そういうわけには」

せつは、ぼうぜんとしていた。ご隠居さま

は、このために来たくれたのだ。せつといっしよに、わびるために。

やっどご隠居さまがすわりなおすと、店のおかみは、ほっとした顔で、こういった。

「こういう店をやってますとね、ときどき品物を盗まれてしまうことはあるんです。とどけを出しても、たいていはどうにもならなくて……こんなにご立派な奥さまが、こんなにきちんとあやまりにこられることは、めったにありませんのよ」

ご隠居さまはいった。

「うちの者が不始末ふしまつをしでかしたので。当然のこと。今回は、どうかこの老おいぼれにめんじて……」

また、腰をまげる。おかみはふたたび押しとどめた。せつは涙が出てきた。

「本当に、ごめんなさい」

せつも、せいっぱいの気持ちをごめて、ご隠居さまのように深く頭をさげた。きょうのことは、わすれないと思った。どんなこと

をわすれても、ばあちゃんの言葉と、きょうのことはけっしてわすれない。

おかみはにこやかに、ふたりを店から送りだしてくれた。通りに出ると、ご隠居さまはふーっと息をつき、大きくのびをして、とんとんと腰をたたいた。

「さて、帰るか」

そういうと、ご隠居さまは、さっさと歩きだした。

せつは、おどおどと道の真ん中にたたずんだ。ご隠居さまは、せつがついてくるかどうか、たしかめもしない。背中がずんずん遠のいていく。追いかけたかった。だが、できなかった。盗みをおかした。そのせいで、ご隠居さまに、あんなことをさせた。店のおかみはゆるしてくれたが、ご隠居さまはおこっているかもしれない。追いかけたところで、「おまえのような者は、もういらぬ」と、つめたく追いはらわれてしまうかもしれない。：そう思いながらも、せつは、いつまでもぐ

ずぐずとご隠居さまの背中を目で追っていた。  
ずいぶん行ってから、ご隠居さまはやつと  
ふりむいてくれた。せつはほっとして、泣き  
だしそうになった。

「なにやっってるんだい。帰らないつもりかい  
」

ご隠居さまの大声がひびいてくる。せつは  
返事をしようとした。だが、喉がつかえて、  
声にならなかった。

ご隠居さまが、またいった。

「ひとりでするつもりだい。おまえは『  
うちの者』だって、さつきからいつてるだろ  
う？」

せつは無我夢中<sup>むがむちゆう</sup>で走っていった。その姿は、  
ばたばたと羽ばたいて親鳥を追う、ひな鳥の  
ようにも見えた。

かんざしは、その後も小間物屋の店先をか  
ざっている。「おそとにでたい」という声を、  
せつがきくことはなくなった。